

---

# 世界で一番好きなひと

美雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界で一番好きなひと

### 【著者名】

N3034B

### 【作者名】

美雪

### 【あらすじ】

世界中で一番近くて遠いひと。あたしは親友に恋をした。

今あたしの髪の毛はそこいらへんのキャラチャラした男の子より、ずっと短い。

真っ黒で短い髪にスカートは似合わないから、ジーンズしかはかない。

髪の毛をセットするのがめんどくさいからこつもキャップをかぶつてる。

『お前は女ぢやつ』

『お前どいつもと氣使わんですむからええわ

もうひとつ口に呑まれついた言葉。

それで。

『なあ明日お前暇? ?』

『んー多分暇。何ぞ?』

好きな人にこんなコト言われたらドキドキだつてするし。

そつけなく答へても、内心結構期待したります。

『一緒に勉強せえへん? テーブルで』

そんな些細な誘いがすくすく嬉しくて。

なのよ。

『なんかさあ、坂井サンと一緒に勉強しようって言われてたわ。一人でやつぱちょい氣まずいやん。』  
…それはビドくないかい？

『お前おつてくれたら僕イ楽やからなあつて。俺、女と喋るん苦手やから』

『何なん、自分坂井サン狙いなん?』

あたし今ちやんと笑いながら言えてるかな。

『ハア？そんなんちやうわつ』

顔赤くなっていますけど。

『…そおなんやあ。なんや、そやつたらあたしおひがええやんか』

てかそんな場所にいるのはあたしが辛い。

『違つてゆつとるやろ・がああ！…』

顔を真っ赤にしてあたしが座っている椅子をゲシゲシ蹴るのはやめてくれませんか？

『なんかなあ、あの子は俺ん中でアイドル的存在やねん！なんか女の子らしくて、可愛くて、守つてやりたなんねん。手出やうなんて思えへん』

そんなまつすぐな田をして、そんなまつすぐな」とを言わないで。

『はいはい。まあ明日は一人でお勉強頑張つてください。  
あー、あたしもう帰るわ』

田に浮かんだ涙を見られたくなくてあたしはそのまま席を立った。

背中のほうからなんだか慌てた声が追つてきたけれど、あたしは振り返らなかつた。

『じいをどう歩いたか、気づけば家についている。

ドアを開けると、殺風景な私の部屋が主を包み込んでくれた。

可愛い置物もないし、ポスターなんかも貼つてない。

全くもつて女の子らしくなんかナイ部屋だけど。その中に不釣り合  
いに置いてある、くまのぬいぐるみは、あいつがくれた。  
なんとなくブーたれたような顔がお前そつくりだ、と笑いながら  
FOキヤツチャーでとつたそいつを渡してくれたのだった。  
どうゆう意味よ、ともくれてみせながらも嬉しさは隠せなくて。  
ブーちゃんと密かに命名して、部屋の一一番立つ場所に置いている  
ことを、あいつはきっと知らない。

だってあいつは最悪の鈍感バカ男だから。

そんなバカ男をもうどうしようもなく好きになつてしまつたあたし  
はその上をゆく奇跡のバカ女なんだろう。

無性に腹がたつて、何故だかお腹がすいて、冷蔵庫をみたけどある  
のは酒のあてばかりで。

まつたくもつて女の子らしくなくて我ながら呆れてしまった。  
もういつのことやけ酒だーと思つたら、ビール一缶すらもなかつた。

何がなんだかわからないけどとにかく悲しくて悲しくて。

私は声をあげて泣いた。

子供のように大きな声をあげて。

その時、玄関のチャイムがなつた。

煩いんだよ、バカヤロ。無視し続けていたけれど、チャイムは鳴り止まない。

鈍感馬鹿男は諦めをしらない馬鹿だから。

もう30分は鳴り続いている。

根負けしてあたしはドアを開けた。

『やつと開いたあ…ちよ、お前顔やばいで』

開けたドアを思いつきり閉めてやつとしたら、左腕一本で止められた。

いくら力を込めても閉まらない。

『男の力にかなうわけないやろ。』

笑いながらいつて部屋の中に入つてくる。

『出でいけアホ』

かまわず部屋に侵入して、勝手にソファに座つてゐる。

『出でいいかアホ。んま機嫌なおして』  
言しながらコンビニの袋を差し出してきた。

中をみると

『なあ…ビール持つてくる意味がわからん』

普通にうむうむときは可憐くケーキとかじやないんだろうか。  
まあ甘いのやんなに好きじやないかど。

『こや、レーマンときは飲まんな。んでお前ん家につきてもアテはあるのに酒ねえし』

笑いながらビールのフタを開けてわたしてくれた。

あんまり癪だつたから奪い取つて一息に飲んでやつた。

『馬鹿、んな飲み方すんな女のくせに

その言葉が悲しく胸に刺さつて、あたしはもつゝ句も言えなくなつた。

『…そんな顔すんなや馬鹿

『馬鹿やもん。知つてるもん。こいつも、男みたいや、可憐げなさ

すきやゆうのじ、なんだ女のくせになんてやううん?

あたしやつたら何ゆうても傷つかへんとでも思つてゐる?

あたしだつて女やで。

あたしのことちやんと女として見てよ』

こんなこと言つづつもりじやなかつたのに。

もう友達にも戻れないかも。

ああそんな困つた顔をしないでほしー。

『…知つてるよ。お前が女なことぐらー。俺のこと好いてくれとる」とぐらー。

ゲーセンでとつたようなぬごぐるみに名前つけて飾つてゐるお前く

『らいや』

もう私は馬鹿以外のなにものでもないのかもしれない。  
とてつもない脱力感に襲われながら尋ねた。

『…何で知ってるんよ?』

『この前飲んだ時、酔ってゆうてた。

ぶーちゃんに触るなあーとかなんとか。

酒弱いくせに飲んべえやからたち悪いわ』

笑いながらいうあいつの顔をみてるとなんだかとても切なくなってしまう。

『今もお前顔真っ赤。ビールで酔ったん?』

お酒のせいなんかじゃない。

自分の気持ちにきづかれてたのが照れくさくて、顔がものすごくあつい。

この人は鈍感でも馬鹿でもなかつたんだ。

それどころかものすごく他人の心に敏感で優しい人だ。

あたしの気持ちにずっと気づかないふりをしてくれていたんだ。

『お前はほんまええ奴やで。ほんまに。んま大切な親友や。絶対ええ人みつけろよ』

涙がとまらない。

目の前には泣きそうな顔をした男がひとり。  
あなたには笑っていてほしいから。

『あんた、何か、勘違い、してへん?』

しゃくりあげながらあたしはいった。

『あたしにはなあ、めっちゃ素敵な彼氏がおつてなあ、今アメリカやねん。帰ってきたら結婚するねん』  
もう涙はでこない。

笑顔すら浮かべて言い放つ。

『しゃあなし式には呼んでやつてもいいで… 親友』

胸がキリキリ痛いけど。

あたしの何倍もきっと目の前のこいつは心が痛いんだろうから。  
もう泣くわけにはいかないんだ。

困ったように笑いながらあいつは言った。

『…もう俺帰るな。なあ、何があつてもお前見捨てたりせんから。  
だから無理すんな』

あいつは帰つていった。

張り付けた笑顔のままあたしは涙をながした。

世界中で一番近くで遠いひと。

大好きだよ、親友。ずっとずっと大好きだよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3034b/>

世界で一番好きなひと

2010年12月9日03時28分発行